

《目的》味覚の感度に影響を及ぼす要因として、性別、年齢、身体状況などが挙げられている。また、妊娠によって、味覚感度の変化があると思われる。そこで今回は、妊婦の塩味・酸味の味覚感度と食習慣に視点をおき、本研究を実施した。

《方法》1990年8月、福岡県久留米市内S病院産婦人科外来の19～42才の妊婦89名(妊婦群)と同病院短大専攻科助産学専攻学生20～30才の22名、同市内S短大食物栄養専攻学生18～20才の94名、計116名(学生群)を対象とした。味覚の鋭敏さを知るために、東洋ろ紙(株)製の、味覚テスト濾紙により味質識別能検査を行った。味覚テスト濾紙は、塩味・酸味には、濃度の異なる溶液に浸漬・風乾した3枚と、甘味・苦味・無味は、各1枚を用いた。同時にアンケートによる食習慣調査、唾液のpH測定検査、クエン酸濃度の異なるレモンゼリーによる酸味嗜好検査などを実施した。

《結果》塩味の3枚の味覚テスト濾紙の味質を、正しく判断した割合は、妊婦群34%、学生群52%で、有意に妊婦群が低かった($p < 0.001$)。酸味については、妊婦群、学生群ともに、26%で差はなかった。塩、酸、甘、苦の四味を合わせた正答率は、妊婦群33%、学生群43%で、有意に妊婦群が低かった($p < 0.001$)。食習慣について、妊婦群が、多く摂取しているものは、果物、野菜、豆製品、卵・牛乳で、学生群に多いのは、スナック菓子、清涼飲料であり、いずれも有意であった($p < 0.01$)。魚介類・肉類・塩辛いおかず、酸味のあるおかずは、両群間の摂取頻度に差はなかった。妊婦群で、卵・牛乳を多く摂取する者は、塩味の識別能が高い傾向にあった。